

1 学校教育目標	
「確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成」	
2 学校経営ビジョン	
目指す学校像	・美しい学校 ・明るく元気な学校 ・信頼される学校
目指す生徒像	・自ら学び考えることができる生徒 ・礼儀正しく思いやりのある生徒 ・心身ともにたくましい生徒
目指す教師像	・協働する教師 ・教育愛に燃える教師 ・人間力を高める教師
<p>(1)生徒が自ら考え、自ら律し、自ら鍛えることを通して、明るく活気に満ちた学校を創造する。【生徒力の向上】</p> <p>(2)教職員が互いに切磋琢磨しながら力量を高め合い、生徒一人ひとりの個性や能力を伸長することができる学校づくりを目指す。【教師力の向上】</p> <p>(3)学校、家庭、地域が相互に理解連携しながら、ともに生徒の健やかな育成を支援する信頼される学校づくりを推進する。【学校力の向上】</p>	

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
<p>(1)「確かな学力」の育成</p> <p>(2)「豊かな心」の育成</p> <p>(3)「健やかな体」の育成</p> <p>(4)生徒の自主性、自律性の育成</p> <p>(5)生徒理解に立った生徒指導の実践</p>	<p>校内研究体制が確立し、授業研究部や学習定着部との連携で、学習意欲の喚起や学習内容の定着について研究を深めることができた。特に家庭学習の充実に向けて、「学習の手引き」を活用しながら、保護者の協力を得ながら取り組んだ。学力向上に関しては、学年が上がるにつれて成果があがっており、校内研究のさらなる深まりや地域の教育力の活用により、確かな学力へと繋げていきたい。</p> <p>不登校対策としては、週1回の教育相談部会を開催し、生徒に関する情報交換や、家庭や関係機関との連携などに努めたが、結果的に不登校生徒数を減らすことができなかった。今年度は、早期発見・早期対応はもちろん、予防にも力を入れながら、スクールカウンセラーへの相談など、気軽に学校へ足を運んでもらえるよう、環境整備にも力を入れたい。</p>

5 総括表						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校運営	○学校経営方針(校長・教頭)	学校教育目標・本年度重点目標の周知	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標を受けて、各教師が自己の目標を設定し、日常の教育活動を実践する。 生徒、保護者の周知率を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標を組織として達成できるよう、自己評価システム自己申告書に明確に位置づける。 学校HP、学校便りを通じて保護者に周知する。学校HPの内容を充実させる。 	A	<p>職員の93%が学校の教育目標を理解して、日々の教育実践に努めたと答えしており、今後もその意識を継続させたい。</p> <p>学校HPについては、内容を整理・充実させるとともに、携帯判HPも開設し、より身近に学校の情報を受け取れるように、条件整備を図った。</p>
	○教職員の資質向上(教頭)	教職員の資質向上およびサービス規律意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> 職員が広い視野を持ち、社会人としての自覚を持つよう、意識の高揚を図る。 評価育成システムの自己の取組目標を達成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> サービス等に対する研修や事例研究の機会を積極的に設け、サービス規律保持の自覚が高まるようにする。 職員が校内研修や校外研修に意欲的に取組み、各自の指導力向上を図る。 	B	<p>機会があるごとに、具体的な例を示しながらサービス等に関する研修を設け、サービス規律保持の自覚を高めることができた。</p> <p>校内研修や校外研修には積極的に取り組み、指導力の向上を図ることができた。</p>
	○危機管理体制の整備(教頭)	生徒が安全に、安心して学校生活を送るための環境整備	<ul style="list-style-type: none"> 携帯メールの加入率を90%以上にする。 職員・生徒の危機対応能力を向上させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 携帯メール加入の促進に努める。 関係機関との連携を図るとともに各種訓練を実施し、体験的な理解を図る。 情報を発信し、生徒の危機管理意識を高める。 	A	<p>携帯メールの加入率が90%を超え、また、携帯版HPを開設することで、情報を確実に発信することができた。</p> <p>避難訓練では、初めて津波に対する訓練を実施することができた。今後、牛津幼稚園とも連携していく予定である。</p>
教育活動	●学力向上(宮崎・高田・武藤・井手・大串)	学習規律及び学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> 学習用具忘れ0人や学習課題の提出を100%を目指す。 家庭学習時間1時間以上の生徒を1年70%、2年80%、3年90%を目指す。 学習に意欲的に取り組む生徒を全体の85%以上を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習に関わる実態調査を継続して行い、教職員の共通理解と学習指導の工夫改善を図る。 基礎基本の定着を目指し、学習課題や自学ノート等の工夫改善を図る。 ICT活用、特に電子黒板を用いて学習意欲の向上を目指した指導法の工夫改善を図る。 	B	<p>IWBの一次導入により、教科や単元によってIWBを活用する機会が増え、学習意欲を引き出す工夫ができた。しかし、授業連絡ノートと学習ノートの活用により、学校生活での学習習慣は確立しているが、1年生に学習用具忘れや課題未提出が改善できず、家庭学習の定着が目標までには至らなかった。</p> <p>また、実態調査から学習時間が0～1時間の生徒が、昨年よりも16%ほど増加してしまい、特に1年生の学習習慣の確立が課題である。今後は、家庭学習のやり方や内容などを具体的に指導・支援していく必要がある。</p>

教育活動	●心の教育 (古賀嘉・北村・片淵)	道徳教育の充実	・各学級1回以上、授業を保護者に公開する。 ・生徒の心に響くような授業を月1回以上行い、豊かな感性の育成を図る。	・フリー参観デーでふれあい道徳を実践し、保護者とともに生き方を考えさせる。 ・劇脚本等の読み物教材だけではなく、詩や絵本、新聞記事等を活用し、心に訴える道徳教育を実践する。	B	・ふれあい道徳では、各学年の実態に応じた題材を用い、保護者にも参加してもらってエンカウンターを行うなどの機会を作った。全学級で行うことができた。 ・読み物教材の活用については、学年でばらつきはあったものの、各学級担任でそれぞれ工夫し、生徒の心に訴えるような授業を組み立てた。今後は資料の共有化を図り、実践を交流していこうにしたい。
	●心の教育 (大串・井手・山口)	人権同和教育の充実	・年1回は人権・同和教育の研修会に全職員が参加し、理解を深める。 ・人権週間を設定し、生徒に生命の尊さ・人権尊重の精神を培う。	・人権・同和教育に関する研修会へ、職員を計画的に参加させる。 ・人権週間において、生徒会主体の集会を実施し、各学年でも計画的に授業に取り組む。	B	・教職員の人権・同和教育の研修には、とても積極的に参加していた。市同研が希望をもらった研修会には、ほぼ予定通りに参加していた。 ・生徒達は日頃の学校生活の中で「けがれる」という言葉を使うことがあり、各学年や人権集会の中で言葉の重みのお話をした。
	○生徒指導	生徒指導の充実 (江口・古賀正・北村・高田)	問題行動の発生件数が昨年度実績より30%以上減少することをめざす。いじめ解消率100%をめざす。	校内生徒指導体制を整え、関係生徒及び保護者に計画的・組織的に関わっていく。計画的な調査を行い、いじめ等への早期対応を図る。	B	定期的に、部会を開き、各学年の生活の状況を生徒指導部で把握し、職員全員で指導にあたった。迅速な対応で生徒・保護者に対応した。問題行動の発生は、昨年より若干増加したが、早期発見・早期解決に努めた。コミュニケーション能力不足によるものも多く見られた。また、事故発生時の生徒の対応について継続的に指導していく必要があると考える。
		教育相談の充実 (津上・香月・古賀嘉・武富)	・週1回の教育相談部会を開催し、日々変化する生徒の情報交換及び状況把握に努める。 ・不登校および不登校傾向生徒の発生予防に力を入れる。	スクールカウンセラー、心の教室相談員、関係機関との連携を深め、組織的な対応に心がける。生徒・保護者対象の講話や相談体制の充実など、気軽に学校へ足を運べるよう、環境整備に努める。	B	・週1回の教育相談部会では、情報交換にとどまらず、具体的な対策まで話し合えるようになり、各学年で対応にあたった。 ・スクールカウンセラーを活用し、専門的な助言を受けたり、生徒・保護者対象の講話を行ったりして、早めの相談ができる体制をとった。
	○部活動 (北村・宮崎)	部活動の活性化	・月1回のキャプテン会議を開催する。 ・あいさつ、返事の徹底や時間を大切にさせる。	部活動を通して強い心を育てる。 キャプテン会議を開き、共通理解を図り、たがいに意識を高め合う。	B	・月1回のキャプテン会議とあいさつ運動を3学期より開始した。今後も継続して徹底をはかりたいと思う。 ・キャプテン会議では、月の目標や部活動で抱えている問題などを意見交換できてよかった。
	●健康・体作り (武富・大串・香月・牟田)	健康な心とからだづくり	・食育に計画的に取り組み、子どもたちの主体的な活動を通して、食生活を振り返り改善することにより、健康な心とからだづくりを目指す。	・生徒会保健部、厚生部を中心に、昨年の活動をもとに、さらに発展的にとり組み、朝食摂取率100%、また食事内容の充実を図る。	B	・登校日の朝食摂取率92.4%。食欲がない、時間がないことを理由に、欠食している実態がある。栄養バランスの偏りもあり、今後は、生活習慣全体を見直した食育が課題である。 ・完全給食実施から2年たち、全生徒全職員で取り組む給食活動が定着した。牛乳パックリサイクル、ゴミの分別にも生徒会活動を中心に実施できている。
	○特別支援教育 (山口・牟田)	特別支援教育体制の確立	全校的な支援体制の充実に努め、支援を必要とする生徒の早期発見に努め、保護者・関係機関の連携を図る。	必要に応じて関係機関と連携し支援の充実を図るとともに、職員研修も深め、学校全体で個に応じた支援体制の強化を図る。	B	・「早期の気づき」「早期の対応」を支援の目標とし、支援体制の充実を図った。 ・気になる行動のチェックリストや保護者アセスメントを活用し、生徒の困り感より正確に把握し、個々のニーズに合わせた支援に取り組んだ。また、家庭との連携を効果的な支援につなぐため、保護者や、家族の支援にも配慮した。
	○生徒会活動の充実 (片淵・差形・川久保)	全校生徒が主役の生徒会	・生徒会役員が、学校行事をはじめ日々の学校生活においてもリーダーシップをとり、全校生徒の活動を活発にする。	評議委員会の活性化、学級討議の有効活用化、専門部活動の活性化を図る。	B	・生徒総会・体育大会・津沼祭などの学校行事は、生徒会役員が中心となってリーダーシップをとり、全校生徒で行事を成功させた。しかし、学級討議や各クラスの専門部の活動になると、させられているという感じがあり、全校生徒が主役という意識になっていない。
	○家庭・地域との連携 (教頭・宮崎)	家庭や地域との連携の強化	・家庭教育、地域教育による学校教育への支援の拡大を図る。	・PTAと連携して地区懇談会の内容を工夫し、連携強化に努める。 ・参加者を前年度より増加させる。 ・体育大会、卒業式等の学校行事を保護者や地域の協力を得て充実させる。	B	・PTA役員や職員の協力の下、各地区で懇談会を開催することができた。参加者がやや減少し、保護者の満足度も58%とやや低かったので、広報活動や内容について検討する必要がある。 ・PTA主催の行事や生徒保護支援委員会などで、家庭や地域との連携を強化することができた。
	○読書指導、図書館教育 (古賀嘉・安田)	図書室の活性化と読書量の増加	・一人年間20冊以上、読書をする。 ・情報教育の一翼を担う学習情報センターとしての機能の充実を図る。	・読書量が増えるような図書室の環境整備を工夫する。 ・読み聞かせを各学級で年2回以上計画する。 ・インターネットや新聞記事を活用し、積極的に情報提供を行う。	B	・読み聞かせは地域のボランティアの方を要請し、各学級で年2回実施することができた。次年度以降も実施したい。図書室の環境整備については、タイムリーな話題を提供し、生徒が読みたくなるような本の紹介を行った。生徒一人あたりの平均貸出し冊数は27.5冊であった。ただ、学年や学級によって偏りがあるので、どの生徒も読書に親しむような手立てを考えていく必要がある。
●ICT利活用教育の推進 (高田・江口・田中)	ICT利活用能力の向上	・教職員全員が電子黒板を使用できるようになる。 ・ICTの効果的な活用法を各教科で検討し、積極的に取り入れていく。	・電子黒板の使用方法を理解できるように研修会を行う。 ・授業の中での効果的なICT活用法を検討し、積極的に授業実践に取り組む。	A	1WB(電子黒板)の1次導入に伴い、全職員の実技研修を行った。そのなかで、使用方法や管理方法などを検討し、2学期から実際に活用した。また、研究授業の中でも活用することで、生徒の意欲を引き出すための効果的な利活用についても考えることができた。各教科ごとではあるが、デジタル教科書を利用して積極的に活用することができた。	

6 総合評価

校内研究も2年目に入り、授業研究部や学習定着部との連携で、ICTを利活用しながら、学習意欲の喚起や学習内容の定着について研究を深めることができた。また、集団づくり部ではQUテストを活用し、望ましい学級集団づくりに取り組むことができた。さらに、本年度は第3学年を対象に、学力向上、基礎学力の定着を図る取り組みを行った。

不登校生徒への対応については、不登校対策が本校の大きな課題であるということを全職員で認識し、その解決に向けて全職員で組織的に取り組むことができた。また、スクールカウンセラーや小城市子ども支援センター、適応指導教室など、関係機関とも積極的に連携することで、不登校の未然防止にも取り組むことができた。

7 次年度への課題・改善策

学力向上に関しては、学習意欲や家庭学習時間の面で十分満足できるものではない。次年度は、校務分掌を見直し、進路指導部を中心にキャリア教育の充実を図りたい。また、新しい実力考査を導入し、客観的なデータに基づく効果的な学習指導・支援の充実、指導の継続性を図っていききたい。

不登校対策については、少しずつ改善がみられてきた。生徒指導上の問題を抱えた生徒、発達障害の疑いのある生徒など、多様な事例がある中で、生徒指導主事や特別支援教育コーディネーターとの連携を深めていきたい。